郷土史への扉

縄文の世界から

上野原縄文の森に行きますと、約9500年前（縄文時代早期前葉）の復元されたムラを見ることができます。ムラの様子を見てみますと、二本の道跡をはさんで竪穴式住居が中央の広場を囲むように建っています。

竪穴式住居は他の遺跡の住居と違って、ドーム状の形をしています。ドーム状の住居についてはその形に対して諸説ありましたが、この時代が最後の氷河期（ヴュルム氷期・七万～一万年前）が終わり少しずつ暖かくなったころで、まだ南九州が冷涼な気候であり、氷河期の人々の生活様式を色濃く残していたことを考慮して、ドーム状の形にしました。

竪穴式住居の中に入ってみますと、意外と広いことがわかります。遺跡で見つかる住居の遺構は竪に掘ってある穴だけですが、復元してみますと、竪穴は床の部分になり、その周りが座席・寝床・荷物置き場となり、ひとつの住居で4～5人は十分に暮らしていける広さとなっています。

当時の人々はどのような暮らしをしていたのでしょうか？基本的には「生き抜くこと」だと思います。すなわち、「食べること」「自然との共生」だと思います。

まず、「食べること」ですが、遺跡には、連穴土坑（れんけつどこう）・集石遺構と食糧を燻製（くんせい）したり石蒸し料理したりする現在の台所の役目をする遺構が見つかりました。特に連穴土坑は、燻製をつくる施設で、これにより食糧を長期に保存することができ、安定した食糧の提供と他のムラとの物々交換を可能にしました。

土器の出現は、それまでの人々の生活をドラスティックに変えた大きな出来事でした。飲み水の運搬・保存、食糧の保存、植物の灰汁（あく）を抜く、煮炊きする、といったことができるようになり、食事の方法や食材としての種類の増加、食糧の加工など、食生活を幅広くそして豊かにしました。

当時の人々が土器をいかに大切にしていたかを土器の表面に描いている文様から見ることができます。繊細で緻密な文様は、一つひとつの土器に祈りや願いを込めながら施している。そのような様を垣間見るような気がします。時代が下り弥生時代・古墳時代になりますと、土器は用途に合わせて多様な形をしていきます。

しかし、土器を作る技術も格段に発達します。しかし、文様はシンプルになり、縄文土器とはほど遠いものになっています。その要因としては、縄文時代に比べ社会が成熟し、土器作りが専門かつ分業となったこと。米の収穫量により地域によって貧富の差が生じ、これが争いの原因となり、さらには社会不安や心のゆとりがなくなったことが挙げられます。

次に「自然との共生」ですが、当時は先にも述べたように氷河期が終わって間もないころで、気候はまだ冷涼で南九州が現在の東北地方ぐらいの気温だったと思われます。周辺の植生も現在のようなカシ・タブといった常緑広葉樹（照葉樹）の森ではなく、ナラ・ブナといった落葉広葉樹の森が広がっていました。意外に思われるかもしれませんが、堅果類（ドングリ・クルミなど硬い実のなる木）の実の量は落葉樹の方が多く、現在の森に比べ豊かな森だったと思われます。当時の人々は、その豊かな森に定住し、森から様々な恩恵を受け、枯渇し始めると別の森に移り住む。このように自然（森）の持つ生命力とうまくバランスをとりながら生活を繰り返していたのではないでしょうか。

また、自然は豊かな恵みだけでなく、脅威ももたらします。縄文時代の地層をみますと幾重にも火山灰が堆積しています。これは南九州の火山活動が非常に活発で、火山噴火の度に多量の火山灰が積ったためです。火山噴火の規模によっては、当時の人々を死滅させたり、避難を余儀なくさせたりしました。大自然の猛威の前では、現在もそうですが成す術はなかったのではないでしょうか。

自然の恵みや脅威と共に生きる。「自然との共生」、これは現代でも通じる生き方ではないでしょうか。

文責＝鈴

連穴土坑